二人称指示における指示詞「そちら」についての考察
－二人称名詞「あなた」との対照を通して－

金井勇人

要旨

「そちら」という指示詞は、どのような条件が揃ったときに、二人称指示に使用できるのだろうか。まず、当該の二人称指示が直示の動作的用法であることが必要である。その上で、指示主体と指示対象との人間関係が＜疎＞であるか、＜疎＞でない場合は両者が何らかの＜対峙＞関係にあることが条件である。人間関係が＜疎＞であれば、「そちら」の機能の一つである「指示の限定性の緩和」が丁寧さを強化するように働き、人間関係が＜疎＞でなければ、「そちら」のもう一つの機能である「彼我の分割」が両者の＜対峙＞関係を際だたせるように働くからである。

本稿では、これらがそれぞれどのような条件の下で成立し、またそれぞれどのようなニュアンスを生み出すものであるのかを、様々なケースを挙げて考察していく。

キーワード　二人称　指示　直示　そちら　あなた

1．はじめに

日本語の「そちら」という指示詞は、本来的には、場所・方向を指示するのに使用される。しかしこの「そちら」は、ときに二人称を指示するのにも使用される。そこには何らかの使用条件があると思われる。というのは、あらゆる場面で、二人称指示としての「そちら」が成立するわけではないからである。

本稿の目的の第一は、「そちら」の使用条件を探ることである。そして目的の第二は、そのような「そちら」が、それぞれどのような機能を担っているのかを考察することである。その際には必要に応じて、二人称名詞「あなた」との対照を行うことにする。

2．「そちら」による二人称指示

二人称指示に使用される「そちら」を、まずは確認しておきたい。

(1)　‥‥突然、向うから、かっぽう着姿で小走りにやってくる山中良子に会った。
「あら、どうしたの？」
「**そちら**こそどうなさったんですか」
「私ね、今、勤めてるのよ」　（『太郎物語』）

(2) そんなある日、すっかり気の緩んでいた私は、道路向かいのスーパーに行こうとして、信号待ちの車数台の後ろを横切ったのです。そしたら、反対車線を走ってきた車にバッタリ。…青年があわてて車を止め、「おばさん、大丈夫ですか」。怒られるとばかり思っていた私は「大丈夫、大丈夫。それより、**そちら**の車は？」と恐縮

して、同じことを何回も言ったように思います。（『毎日新聞』1999.09.06朝刊）

(1)(2)における指示詞「そちら」は、確かに二人称を指示する。それは、指示詞「そちら」を例えば二人称名詞「あなた」[1]に置き換えても、同一の指示対象を指し続ける、ということからも明らかである。

(1)'　「**あなた**こそどうなさったんですか」

(2)'　「大丈夫、大丈夫。それより、**あなた**の車は？」

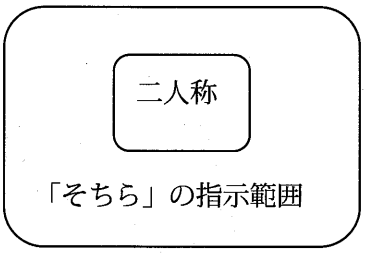
なぜ「そちら」による二人称指示が可能なのか。

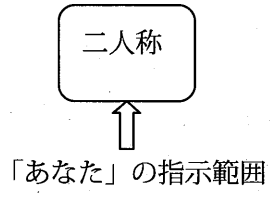
「そちら」は、「そちら」という方向に存在する＜全てのもの＞をその指示範囲に含むことができる。そして、その「そちら」の指示範囲には当然、最終的な指示対象である当該の二人称も含まれる。

このとき、「そちら」の指示範囲と指示対象（二人称）とは、言わば＜全体－部分＞という関係になる。ここで、＜全体＞から＜部分＞へというメトニミーによる転換が行われ、「そちら」による二人称指示が成功するのである。

一方、二人称名詞「あなた」の指示範囲は、言うまでもなく最初から二人称と一致する。

(3)





３．「そちら」から「あなた」への置き換え

前節でも見たように、二人称指示に使用される指示詞「そちら」を、二人称名詞「あなた」に置き換えても、同一の指示対象を指し続ける。

(1)'　「**あなた**こそどうなさったんですか」

(2)'　「大丈夫、大丈夫。それより、**あなた**の車は？」

このような「そちら」から「あなた」への置き換えにおいては、(3)から察せられるように、その指示の精度が高まるものと思われる。

(4)　指示詞「そちら」　⇒　二人称名詞「あなた」　…　指示の精度が高まる

(4)の原則から、(1)(2)の「そちら」を、(1)'(2)'のように「あなた」に置き換えても、同一の指示対象（二人称）を指し続けるということは、当然の帰結であると分かる。

---

[1]　二人称名詞には「あなた」の他にも「おまえ」「きみ」など様々なものがあるが、本稿では特に断りがない場合、「あなた」を二人称名詞の代表として扱うことにする。また、「きみ」「おまえ」「あんた」などが「あなた」よりもあたりが強いのは、文体レベルの差異に起因すると考える。「そちら」と「そっち」との関係も同様である。

逆に、「そちら」から「あなた」への置き換えが不可能な場合、それはそもそも二人称指示ではないと考えられる。（例えば、遠くに住んでいる人にその地の気候を尋ねるとき）

(5)　　**そちら**はもう暖かくなりましたか？

(5)'　＊　**あなた**はもう暖かくなりましたか？

(5)から(5)'への（文意を同一に保ったままの）置き換えは不可能である。その理由は、(5)の「そちら」自体が、場所・方向を指示するための本来的な用法によるものであり、決して二人称を指示するために使用されたのではないからである。

4．「あなた」から「そちら」への置き換え

しかし二人称名詞「あなた」が、指示詞「そちら」へ置き換えられるかどうかとなると、事情は異なる。「あなた」から「そちら」への置き換えは、先の「そちら」から「あなた」への置き換えとは逆に、指示の精度を低下させることになるからである。

(6)　二人称名詞「あなた」　⇒　指示詞「そちら」　…　指示の精度が低下する

指示の精度が低下するのだから、二人称を指示できなくなるかもしれない、という危険と隣り合わせである。にもかかわらず、「そちら」による二人称指示が成功するのは、そこに「そちら」特有の機能が加わるから、と考えられる。そうした機能が、精度の低い「そちら」による二人称指示をサポートし、指示を成功に導く。

また、そうした機能が付加されることによって、「あなた」などの二人称名詞では出せないニュアンスが出てくる。そうしたニュアンスを求めて、発話者は「そちら」を選択するのだろう。しかし、そうしたニュアンスが不要ならば、その場面での「そちら」は不自然となる。

以下では、様々なケースにおいて、「あなた」と「そちら」の置き換えテストを行う。それによって、「そちら」特有の機能とは何か、またそれを要求する（しない）場面とはどういうものか、といったことが見えてくるだろう。

5．直示の動作的用法

次の２文においては、「あなた」を「そちら」に置き換えることができない。

(7)　２０代は長嶋さんとＳＭＡＰ、３０歳以上はこども――。住友生命（本社・大阪）が９～１０月、全国の男女１５００人ずつを対象に「**あなた**に元気を与えてくれる人はだれ？」と尋ねたところ、こんな結果がまとまった。

（『毎日新聞』1999.12.24 朝刊）

(8)「北の大地」が**あなた**を呼んでいる…　農業校研修生、山村留学生募る――北海道で

（『毎日新聞』1999.12.10朝刊）

(7)'　？「**そちら**に元気を与えてくれる人はだれ？」

(8)'　？「北の大地」が**そちら**を呼んでいる…

上記は、アンケートや誘い文句などにおける二人称指示である。その大きな特徴は、指示対象にとって、指示主体の存在や属性が重要な意味を持たない、ということである。[2]

「あなた」の場合、原文(7)(8)に見られるように、このような条件下でも指示が成功する。しかし、(7)'(8)'のように「そちら」に置き換えると、これらは不自然となる。なぜか。

「あなた」も「そちら」も、その指示のメカニズムはともに直示[3]である。直示には、動作的用法(gestural usage)と象徴的用法(symbolic usage)があるという(Levinson:1983)。動作的用法とは、現場での実際的な観察に依存して解釈される直示の用法である。Levinsonは次のような例を挙げている。

(9) This one's genuine, but this one is a fake.
(これは本物です。しかし、これは偽物です。)

(10) He's not the Duke, he is. He's the butler.
(彼は公爵ではありません。彼がそうです。彼は執事です。)

現場での観察を実際に行わなければ、(9)における前者と後者の"this"を、非同一指示として適切に解釈することは難しい。また、(10)における"he"についても同様である。このような直示の用法が、動作的用法である。

もう一方の象徴的用法とは、発話事象における媒介変数の知識に依存して解釈される直示の用法である。Levinsonは、次のような例を挙げている。

(11) This city is really beautiful.
(この街は、本当に美しい。)

(12) You can all come with me if you like.
(あなたたちが望むなら、皆、私と一緒に来てもいいですよ。)

(11)では、発話者が"this city"にいる、という媒介変数的な知識があれば、現場での観察がなくても、"this"を使用・解釈できる。(12)では、ある集合について、"you"によってその成員すべてを指すのなら、現場での観察がなくても、"you"を使用・解釈できる。それは例えば、彼らのうちの何人かが目の前にいなくても、"you"によって、その者たちを指し漏らすことがないということからも明らかである。これが象徴的用法である。

ここで「あなた」と「そちら」の問題に戻る。

(7)(8)の「あなた」は、象徴的用法と解釈するべきだろう。この場合、「あなた」=「今、このアンケート・広告を読んでいる人」、というような媒介変数的な知識のみで、その使用・解釈が成功するからである。このような場合、「あなた」は何ら不自然ではない。

---

[2] 街頭インタビューなどでも、「そちら」は不自然と感じられるが、この場合も(7)(8)と同様に、指示主体(インタビュアー)の存在や属性は重要な意味を持たないからである。

[3] 直示とは「談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むこと(金水 1999:68)」である。ただし本稿では、二人称指示に使用される場合のみを考察範囲としている。

一方、(7)'(8)'の「そちら」では不自然なのはなぜか。一見すると、この場合も「そちら」＝「今、このアンケート・広告を読んでいる人」というような媒介変数的な知識のみで、その使用・解釈が成功しそうである。しかしよく観察してみると、決してそうではない。

「そちら」は性質上、どうしても「こちら」の存在を前提とする[4]。しかし(7)(8)のような状況では、指示主体の存在や属性が重要でないため、「こちら」の存在自体が前提となりにくい。これが、(7)'(8)'の「そちら」が不自然な理由であると考えられる。

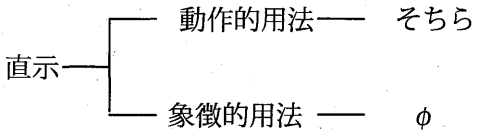
つまり、「そちら」の使用・解釈には、＜現場での観察[5]＞が必要なのである。発話者が、自身を「こちら」として、かつ指示対象を「そちら」として捉えることができるのは、＜現場での観察＞を行った結果であり、これは動作的用法に他ならない。

以上の議論により、次のことが言えるだろう。

二人称指示における指示詞「そちら」は、動作的用法のみを持つ。「そちら」は、指示対象の候補が２名以上いれば当然であるが[6]、たとえ候補が１名しかいない場合でも、発話者を指す「こちら」を前提とするために、必然的に動作的用法となる。したがって、「こちら」の存在自体が前提とならない場合は、その使用が不自然となる。

一方、「あなた」は、必ずしも具体的な「私」の存在を前提とするわけではない。したがって、指示対象の候補が２名以上いれば動作的用法となるが、候補が１名しかいない場合、それは象徴的用法として機能する。[7]

(13)「そちら」の用法



以下では、「そちら」が動作的用法でのみ成立するということを前提にしながら、さらにそれぞれの用法における特徴について、細かく見ていく。

６．そちら（指示の限定性の緩和）

「そちら」の具体的な用法の１つとして、まず以下のようなものを挙げることができる。

(14)夫の携帯電話にかけたつもりだった。ところが、受話器から聞こえてきたのは、声変わり真っ最中と思える男の子の怒声。私は震え上がってしまった。……「あの…

---

4 三上（1972:177）に従えば、この場合の人間関係は「楕円的（相手と話し手との原始的な対立の様式）」なものである。

5 ここでは＜現場での観察＞を、擬似的なものも含めた大きな概念として捉える。それによって、手紙・電話・E-mail というような媒体における場合も、同様に考察できる。

6 インタビュー場面において、当然「こちら」は前提とされない（注２参照）が、２番目にインタビューされる人は「そちら」で指示できる。それは、１番目にインタビューされる人が、「こちら」と認識されるからである。

7 以下、本稿に登場する「あなた」は、すべて基本的には象徴的用法である。それは、指示対象の候補が２名以上いないからである。

…すみません。**そちら**の番号は」と言い終わらないうちに「るせんだよう。ひとが寝てんのにヨオ。いたずらかよ。……」　（『毎日新聞』1999.01.16朝刊）

(15)「どちら様でいらっしゃいましょう？」と訊かれると、

「ご主人はいるかね？」

「は？　あ、女将さんですね。はい、おりますが、**そちら**様[8]は……」

男はチラッと左右へ目を走らせ、上衣の内ポケットから黒い手帳を覗かせた。

「あ、これは警察の――」　（『女社長に乾杯』）

(14)(15)の「そちら」は、(4)の原則により、二人称名詞「あなた」へと置き換えられる。

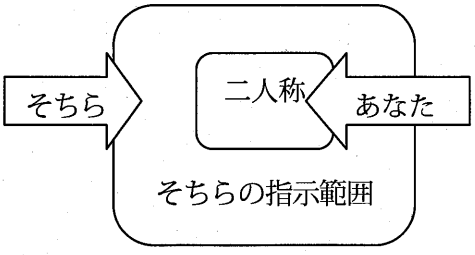
(14)'　「あの……すみません。**あなた**の番号は」

(15)'　「はい、おりますが、**あなた**様は……」

しかしながら、これらの当事者たちは初対面である。このように、初対面の場合を典型とした＜疎＞[9]の相手に対して、いきなり二人称名詞を用いて「あなた」の領域へと入り込むことは、失礼にあたると思われる。「あなた」の領域へ入り込むことが許されるのは、互いの信頼関係や役割関係が確立されてからのことだろう。

したがって指示主体は、原文(14)(15)のように、「あなた」の代わりに、まず「そちら」を選択し、「そちら」の領域（指示範囲）という遠くから、徐々に接近するのである。これが、＜疎＞の相手に接する際の社交上のストラテジーであると思われる。このときに「そちら」が選択される理由は、端的に言えば、「あなた」の存在する場所も含めて示す「指示の限定性の緩和」に他ならない。

(16)＜疎＞である二人称に対しては、いきなり「あなた」の領域に入り込むのではなく、指示の限定性を緩和して、「そちら」という遠くから接近していくことが求められる



これを受けて、(13)を改訂すると、次のようになる。

(17)「そちら」の用法（改訂１）

直示 ┬ 動作的用法 ── (疎＋)　── そちら（指示の限定性の緩和）
　　└ 象徴的用法 ── ϕ

8　「そちら」「あなた」は、「様」や「さん」という接辞を付加することにより、より丁寧な表現となる。しかしその丁寧さは、あくまで接辞が担う機能であって、「そちら」「あなた」本体が直示であることは、変わらない。本稿で重視するのは、この「直示であること」なので、接辞が付加されたものも、付加されていないものも、同様に扱うことにする。

9　本稿では、＜疎＞を、①指示主体が指示対象の呼称を知らず、②指示主体と指示対象との間に信頼関係や役割関係が構築されていない状態、と定義する。

以上の場合、動作的用法であることは言うまでもないが、しかしそれ以上に重要なのは、指示対象に対する「指示の限定性の緩和」に重点が置かれる、ということである。

7．そちら（彼我の分割）

前節で、指示対象が＜疎＞であるときの「そちら」は、丁寧な接近を行うためのものであるということを確かめた。しかし、指示対象が＜疎－＞[10]である場合にも、やはり「そちら」は用いられる。

(18)「だって、歌舞伎の人なんて、どうせ、頭でっかちの六頭身だろ」
「何言ってるのよ、**そちら**だって、胴長のガニ股のくせに」
三吉さんのいいところは、そういう悪口が何となく、上品でさらりとしているところである。
「太郎君に教えといてあげるけどね、西洋式に言うと、胴長の六頭身も芸が加わると、高脚ガニになるってことなのよ」（『太郎物語』）

(19)となりの中原―桐山戦が終局した。２人の感想戦が面白い。「**そちら**が全然だめでしょう」「こっちが悪いとはどういう感覚をしているの？」「アッハッハ」「ンッ、せせら笑いされちゃったよ」……。もう漫才そのものだ。
（『毎日新聞』1999.09.02 朝刊）

(18)においても、(19)においても、「そちら」の代わりに、二人称名詞「あなた」を用いるという選択肢はある。

(18)'　「何言ってるのよ、**あなた**だって、胴長のガニ股のくせに」
(19)'　「**あなた**が全然だめでしょう」

もちろん、固有名詞を使用することも可能であるが、それは当面の問題である「直示」ではないので、ひとまず脇へ置いておく。

(18)"　「何言ってるのよ、**太郎君**だって、胴長のガニ股のくせに」
(19)"　「**中原さん**が全然だめでしょう」

(18)(19)ともに、両者は＜疎－＞の関係にある。したがって(18)(19)の「そちら」は、＜疎＞の相手に接近するための「そちら（指示の限定性の緩和）」ではない。

指示の精度を高めるなら、むしろ(4)の原則に従って、(18)'(19)'のように「あなた」を選択した方が良い。ポライトネスの観点から見れば、「あなた」も、まったくの無標とは言えないが、少なくとも＜疎－＞の場合、その使用は許容されやすいだろう。つまり(16)で見たような「あなた」による指示の限定性が、＜疎－＞の相手に対してならば、問題視するほど

---

10 ＜疎－＞とは、「親密である」というような積極的な意味ではなく、少なくとも＜疎＋＞ではないということを表す。他の機軸においても、＜－＞は、そのような意味合いで使用する。

失礼とはならないということである。[11]

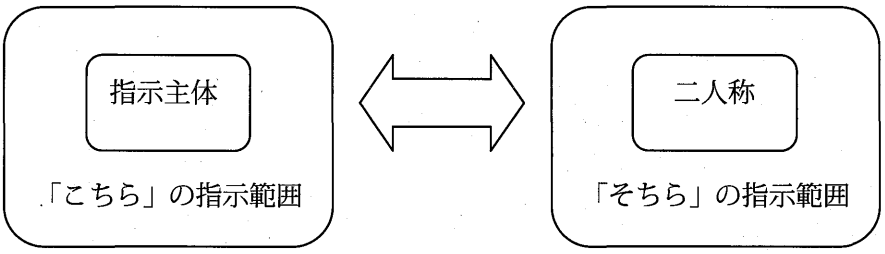
にもかかわらず、わざわざ「そちら」を選択するというのは、明らかに有標である。その意図は、そこに存在する＜対峙＞[12]関係を積極的に表現したいということに他ならない。

(18)で「三吉さん」は、（肩入れする）「歌舞伎の人」と自分自身とを心的に一体化させ、それを（潜在的に）「こちら」と捉える。そして、その「歌舞伎の人」を悪く言う「太郎」を「そちら」と捉える。したがってここには、明らかに＜対峙＞がある。また(19)では、将棋盤を挟んでの勝負という一時的な＜対峙＞がある。

このような場合に、指示詞「そちら」が選択される理由は、端的に言えば「彼我の分割」である。＜疎－＞の関係においては、本来的には、当事者同士が彼我に分割されていない（本人たちがそういう意識を持っていない）。そのような状況において、あえて指示主体が「そちら」を使用するということは、何らかの理由のために、両者の間に横たわる＜対峙＞を積極的に表現したい、という意図があるものと考えざるを得ない。

このことを逆に言えば、＜対峙＞を表現する何らかの理由があれば「そちら」の使用が自然となる、ということでもある。

(20) ＜疎－＞の関係において、両者の間に＜対峙＞が存在する場合、それを積極的に表現するために、「そちら」によって指示主体と指示対象（二人称）とを彼我に分割する



これを受けて、(17)を改訂すると、次のようになる。

(21)「そちら」の用法（改訂２）

直示 ── 動作的用法 ┬（疎＋）― そちら（指示の限定性の緩和）
　　　　　　　　　　└（疎－）－（対峙＋）－ そちら（彼我の分割）
　　└ 象徴的用法 ── φ

「彼我の分割」とは、当該の「そちら」が動作的用法であることを、さらに積極的に表明することである、と言い換えることもできるだろう。

８．理不尽な「彼我の分割」

＜対峙＞を表現するための十分な理由がある場合、「そちら」の使用が自然となるという

---

[11] 相手が上位者である場合は、その限りではない（金井:2003）。この点は後に再び触れる。
[12] 本稿では＜対峙＞を、空間的あるいは心理的に何らかの対立関係にあること、と定義する。

ことを、前節で確かめた。本節では、不適切な「そちら」を検討することによって、この原則を再確認したい。

(22)お母さんは年をとった。息子に電話して「会いにきて」と頼んだ。行くと、お母さんは歌を歌おうとするが、最後まで歌うことができない。息子はお母さんを抱いて、歌った。「いつまでも　どんなときも／ぼくが　いきているかぎり／**あなた**は　ぼくのおかあさん」　（『毎日新聞』1999.12.24 朝刊）

(23)「アコ、**あなた**はどうしてそんなに悲しいほど美しい目をしているの？」と、やがて近づく別離のためひときわ感傷的になった級友が言った。「そう？　あたしの目は綺麗？　本当にそうなの？　よかったわ。本当によかったわ。‥‥」と、藍子は変にはしゃいで、混乱した言葉をややヒステリックに言って、友達の腕を痛いほど握りしめ、それから…　（『楡家の人びと』）

(22)においても(23)においても、指示主体と指示対象は取り立てて＜対峙＞の関係にない。この「あなた」を「そちら」に置き換えると、不自然となる。

(22)'　？「ぼくが　いきているかぎり／**そちら**は　ぼくのおかあさん」

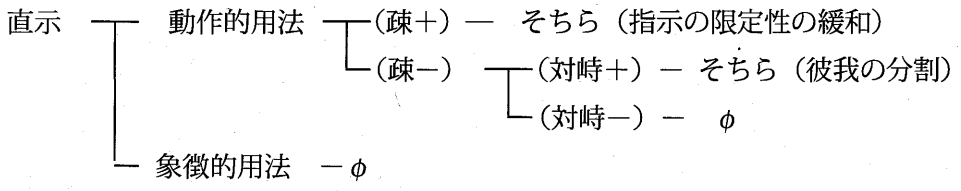
(23)'　？「アコ、**そちら**はどうしてそんなに悲しいほど美しい目をしているの？」

これらの「そちら」が不自然なのは、＜対峙＞を表現するための十分な理由がないのにもかかわらず、「彼我の分割」が行われるからである。これは指示対象からは、理不尽にも「壁」を作られた、というように感じられるだろう。それが(22)'(23)'が不自然であり、かつどこか突き放したような冷たさを感じさせる理由である。[13]

つまりこのような場合、彼我を分割させる機能を持たない、象徴的用法としての「あなた」が、適当であると思われる。[14]

以上を受けて、(21)を改訂すると、次のようになる。

(24)「そちら」の用法（最終改訂）



9．おわりに

本稿では、二人称指示に使用される指示詞「そちら」の様々な用法について考察した。そ

13　もっとも、この性質を利用して、積極的に突き放すような言い方もできる（例：話し合いが決裂しそうなときの「それは**そちら**の言い分でしょう？」）。

14　しかしながら注 11 で見たように、指示の限定性という点で、上位者に対する「あなた」の使用は難しい。したがって＜疎－＞の上位者に対する適切な直示的呼称は存在しない、ということになる。そのような場合、固有名詞や普通名詞などの記述的呼称を選択せざるを得ない。

れをまとめると、次のようになる。

1．「そちら」は、専ら直示の動作的用法として用いられる。

2．指示対象が＜疎＋＞のとき、それは「指示の限定性の緩和」を第一の機能とする。

3．指示対象が＜疎－＞で、かつ指示主体と（一時的な）＜対峙＞関係にあるとき、それは「彼我の分割」を第一の機能とする。

以上のように本稿では、「そちら」が使用される条件と「そちら」の機能との相互関係について、考察を行った。

参考文献

神崎高明　1994『日英語代名詞の研究』研究社

金水　敏　1999「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』vol.6-4,67-91　言語処理学会

近藤泰弘　2000『日本語記述文法の理論』ひつじ書房

鈴木孝夫　1973『ことばと文化』岩波書店

瀬戸賢一　1997「意味のレトリック」『文化と発想とレトリック』94-177　研究社

田窪行則　1997「日本語の人称表現」『視点と言語行動』13-44　くろしお出版

多門靖容　2002「比喩分析の新展開～換喩・提喩を中心に～」第39回 表現学会（桜花学園大学 2002.6.1）シンポジウム資料

廣瀬幸生　1997「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』1-89　研究社

三上　章　1972『現代語法新説』くろしお出版（復刊第一刷，初出は1955刀江書院）

Levinson, S.C.　1983　*Pragmatics*　Cambridge University Press
（安井稔・奥田夏子訳1990『英語語用論』研究社）

金井勇人　2003「失礼さという観点から見た二人称指示の体系」『文学研究科紀要』48　早稲田大学大学院文学研究科

引用資料

赤川次郎　『女社長に乾杯！』　新潮文庫

北　杜夫　『楡家の人びと』　〃

曽野綾子　『太郎物語』　〃

新田次郎　『孤高の人』　〃

毎日新聞　（1999年版 CD-ROM）